

東京小旅行 2022



2022年11月、12月追記

旅のチカラ研究所 植木圭二

大都会東京には近代国家の首都の顔以外に江戸情緒が残る街並みと日本の近代化の礎を築いた施設が交錯するように存在している。今回それらの施設を一緒に巡った友人たちとの数奇な巡り合わせを含めて紹介したい。その刺激を受けて後日に妻と巡った小旅行も追記する。

■時空を超えて集まった人たち

今、私たち4人は山手線の駒込駅近くのレストランで昼食を食べている。その4人の繋がりが実に面白い。

私の前の席には高校時代のサークル仲間のチーちゃん（女性）、その隣にマモちゃん（男性）がいる。私を含めたこの3人は、高校時代は別々の高校に通っていて学年も1つずつ違う。ただし市内の高校を横断するサークル「桐生青春友歩」（以下、友歩）のメンバーだった。その友歩については後で触れるが、高校時代のことだから今から50年近く前で、その仲間が数年前に再開して今ここにいる。

そしてもう1人、私の横にフランス人のドミちゃんがいる。私たちより10才くらい若い初老の紳士で、彼はフランスから日本に遊びにきており数日前からマモちゃんの家泊まっている。ドミちゃんは同じく友歩にいたヨッちゃんの知り合いで、ヨッちゃんからマモちゃんを紹介された。

そのヨッちゃんとは、女子高校を卒業して米国に渡り米国人の男性と結婚し、現在も米国に住んでいる。そのヨッちゃん夫妻が20代後半の頃に米国からフランスに旅行に行き、パリのレストランの隣の席にいたのが当時高校生のドミちゃん、日本が大好きなドミちゃんは日本語と英語が話せるヨッちゃんと意気投合した。

そして自然消滅的に関係は切れていたが、30年近く時が流れてSNSでドミちゃんがヨッちゃんを探し出して連絡をとって再び繋がった。これもまた数年前のことだと聞いている。

つまり50年前の高校時代のサークル仲間と、同じサークルにいた仲間が40年前にフランスに旅行した時に知り合った友人が同席している。

彼とは、私もチーちゃんも初対面だがそんな気もしないから不思議なものだ。

■ 桐生青春友歩

友歩について、私の自分史「私の旅史①【夢多き青春編】」から抜粋して紹介する。

私は高校時代にいろいろな活動に参加していた。群馬県桐生市内の高校生たちが、高校を横断して集まった自主サークル「桐生青春友歩」というものにも参加していた。私が通っていた高校は男子校なので女子高生と話ができるこのような機会は極めて少なかった。

このサークルの日常的な活動は桐生市内のいろいろな学校の高校生たちが月一回くらい集まって語り合い、レクリエーション、ハイキングなどをするもので、今でも覚えているのはどこかの公民館を借りて餃子を作って食べるという料理教室もやった。私はその時に生まれて初めて餃子を作った。



【私が高校2年生の桐生青春友歩のイベントでの記念写真 最前列の一番右が私】

高校2年生の夏、このサークルの夏休みのイベントで30人程の男女の高校生たちが赤城山南面の公民館に泊まる旅行があった。昼はレクリエーション、食事は自分たちで作り、夜を徹して話し合いを行った。このサークルは政治的、宗教的なものではなく、純粋に高校生たちが自分たちの夢や悩みを共有し社会に対して何ができるかという比較的真面目な目的で集まっていた。だから議論は身近なもので自分化して面白かった。

そして私が友歩の運営を高校2年生の夏休み明けの2学期から引き継ぎ、3年生になっても受験生でありながら私なりに一生懸命にやっていた。そして次の世代に託したが、残念ながらその後は自然消滅した。

友歩の運営経験で私が学んだことは大きかった。同じ市内の高校生といっても、高校によって価値観や志向が全く異なっていた。進学校だけでなく工業高校、商業高校、お嬢様高校とあって、そんな高校生たちをまとめていくのは相当に難しいということがよく分かった。

今振り返ると、年頃の男女が集うので出会いの場という意味合いが強かったかもしれない。

■旧古川庭園、飛鳥山

そんな旧友とでもいうのか、新友とでもいうのか、不思議な仲間たちと本日は東京の北区の名所巡りをする。

まずは旧古河庭園に行く。小高い丘に洋館、斜面には洋風庭園、低地には日本庭園がある。洋風庭園はバラの花が咲いており、日本庭園はちょうど紅葉が始まった頃だ。

この庭園は数少ない大正時代の庭園の原型を留める貴重な存在だとパンフレットに書かれている。確かに和と洋の調和は絶妙に感じられる。



【旧友と新友たち】



【旧古河庭園の石造りの洋館（大谷美術館）】



【紅葉が映える旧古河庭園の日本庭園】

今回の案内役のマモちゃんはこの近くに住んでおり、地元なので実によく知っている。

私たちはしばらく歩いて洒落た和菓子の店に立ち寄り、団子と饅頭を買って飛鳥山公園に行く。地元の彼はブルーシートを持参しており、公園でシートを敷いたピクニックになる。それはまた高校生に戻ったようで楽しい。

飛鳥山公園といえば桜の名所として有名だ。そのように仕上げたのは八代将軍の徳川吉宗で、江戸っ子たちの行楽の地とするためだった。それから約 300 年、今やフランス人も楽しんでいる。

また公園内には都電や蒸気機関車の展示車両があって実際に乗ることもできる。

最近の NHK の大河ドラマ「青天を衝け」の主人公になった渋沢栄一が住んでいたので関連施設も多い。渋沢は日本の近代経済社会の基礎を築いた人で、簡単に言うと彼の思想は道徳と経済の両立である。私が尊敬する松下幸之助の思想に繋がっていくのだろう。



【飛鳥山公園にて】

渋沢資料館は渋沢栄一の旧邸「暖依村荘」跡に設立された。当初は旧邸内に残っていた大正時代の 2 つの建物「晩香廬（ばんこうろ）」、「青淵文庫（せいえんぶんこ）」だけだったが、1998 年に本館を増設し、現在は 3 つの建物がある。

その中の「青淵文庫」は、彼の 80 才のお祝いと男爵から子爵に昇格した祝いを兼ねて贈られた建物だという。私も 80 才になったならば、こんな立派な建物でなくてもいいから、ログハウスの 1 棟でもいただくとありがたい。それも妄想か。



【渋沢栄一の青淵文庫】

フランス人のドミちゃんは日本語がペラペラだ。信じられないことだが、住んだことも留学経験もないという。彼は日本が好きでたまらないと言っているから、やはり好きこそものの上手なりのだろう。過去数回日本を訪問して、時々ヨッチちゃんの友人宅にも泊めてもらっている。

彼は日本文化の中でも特に神道、それも明治政府が作った天皇家の伊勢神宮を頂点とする系統ではなく、いわゆる日本古来の土着の神様を崇拝する神道に心酔している。だから大国主（オオクニヌシ）の国譲り物語なども良く知っており、私との会話も盛り上がる。

彼の明日以降の予定を聞くと、新宿のお茶会に出てその後は熊野古道を歩くと言っているから筋金入りと言っているだろう。

王子駅から山手線の大塚駅までは都電荒川線に乗って移動する。久しぶりに乗る都電は実に新鮮で、これも昔の友人に再開したような気持ちになるから嬉しい。マモちゃんの上手いプランニングに感心する。

都電は、昭和30年代の最盛期には営業キロ約213kmあったが、時代の流れで1972年以降は現在の三ノ輪橋停留場から早稲田停留場を結ぶ12.2kmのみの運行になっている。



【大塚駅前の停留所にて 三ノ輪橋行きと早稲田行きの2つの車両】

■旅の記録

旅行は2022年11月11日（金）に実施、行程を以下に記す。

- ・1日目 11時30分、駒込のデニーズに集合して昼食、
「旧古河庭園」、「飛鳥山公園」、装束稲荷前の「器のヤマワ」、
「王子稲荷神社」を巡り、都電荒川線の王子駅前から大塚駅前まで乗車して解散

費用は1人約3000円、内訳はデニーズの昼食、団子と饅頭、旧古河庭園入園料、都電など

■谷中銀座

マモちゃん、チーちゃん、私、そして時々この3人に加えて他の人も加わって北区の隣の荒川区の谷中銀座を何回か訪れたことがある。

谷中銀座通りの入口には「夕やけどんだん」と呼ばれる階段があつて、ちょっとした名所になっている。この一風変わった名前は一般公募によって命名され、名前のおりこの階段からは美しい夕焼けを眺めることができる。商店街は古い店と新しい店が入り交じって存在しており、新旧問わず夕陽を浴びることによって輝きを増して、全体的にいい具合に調和している。

時間を超えて相互に照らし合わせながら存在するような感覚は、人間関係にも通じるものがあり、友歩で活動した昔と今の交友の輝きに相通じるものかもしれない。



【谷中銀座の入口の看板】



【谷中銀座入口の看板前「夕やけどんだん」】

地元の通行人、そして観光客も多い。若い人や年配者も、時々外国人の姿も見かける。

その外国人が多く出入りする「ザクロ」という料理店が夕やけどんだんを降りた所にある。店の看板にはトルコ料理、イラン料理、ウズベキスタン料理と書かれている。日本から見るとその3国はシルクロードや中東で同じように見えるが、実際にはかなり離れている。

この店に私を連れてきてくれた人は私の旅友の通うプールの友達で、これもまた数奇な運命の繋がりが、ここでは触れないでおこう。

店内はカーペットが敷かれカラフルな飾り付けがとても個性的で、時々ベリーダンスショーも開催されるという。店員のお勧めの定食のようなものを注文したが、なかなかいける味だった。

今度はベリーダンスを観に来たい。



【ザクロの店内】



【ザクロの料理】

千駄木駅方面に少し歩くと、指人形劇の「笑吉劇場」とい珍しい劇場がある。

手作りの指人形が演じる舞台があって、舞台の後ろにすだれが架かっている。すだれの裏からこの劇場の館長がひとりで指人形を操って演じるもので、実に風情がある。演目は11、ひとつが3分程度なので40分弱の観劇になる。別料金を払うと指人形が似顔絵も描いてくれる。見事な筆さばきで瞬く間に描くので人形劇とは違う驚きがある。

ここにもデミちゃんは来たことがあると言っていたが、外国人はとても喜びそうな場所だ。もちろん日本人にとっても指人形劇にはあまり縁がないからお勧めの場所だろう。



【人形劇の舞台と人形たち】



【似顔を描く人形】

■現代日本の礎を築いた館（2022年12月追記）

友歩の高校時代というほど昔ではないが、私と妻との付き合いも長い。妻とは世界各地、日本のほとんどを旅行しているが、東京の名所巡りをした覚えがない。一連の都内巡りの小旅行に触発されて、夫婦で現代日本の礎を築いた場所を巡る都内泊の小旅行をすることになった。

そんな小旅行にうってつけの切符「東京メトロ24時間券」がある。同様な切符で1日乗り放題というものもあるが、午後から使ってもその日だけしか使えない。しかしこの切符は24時間有効なので2日間にまたがる旅には適している。値段も600円と手頃だ。

その切符を使い、最初に訪れたのは文京区にある鳩山会館で、東京メトロ有楽町線の護国寺と江戸川橋の中間地点に位置している。文京区という名前が示すように、このエリアは文教地区で講談社や光文社などの出版社も目に留まる。

鳩山会館は、関東大震災の翌年1924年（大正13年）築で、総理大臣となった鳩山一郎、その息子で外務大臣をつとめた鳩山威一郎、さらに一郎の孫にあたる1947年生まれの鳩山由紀夫、その弟の鳩山邦夫という政治家を生み育てた。庭園には鳩山一郎の銅像があり、庭園から眺める本館は威風堂々として、さすがに日本の昭和史の作った建物という感じがする。

鳩山会館はこの一族を中心とした政治的資料以外に個人的なものも保存する博物館になっており、あまり知られていない資料など日本の昭和史を垣間見ることができる。私は鳩山由紀夫兄弟ならリアルタイムで知っているが、その父や祖父はもはや歴史上の人物になっており全く現実味がない。しかし家の中を歩き、展示物を見ていると、歴史上の人物も実に身近に感じることができるから実に不思議なものだ。この感覚を味わうだけでもここに来た甲斐があるというものだろう。



【鳩山会館の外観 庭から撮影】



【邸宅の内部 左が1階、右が2階】

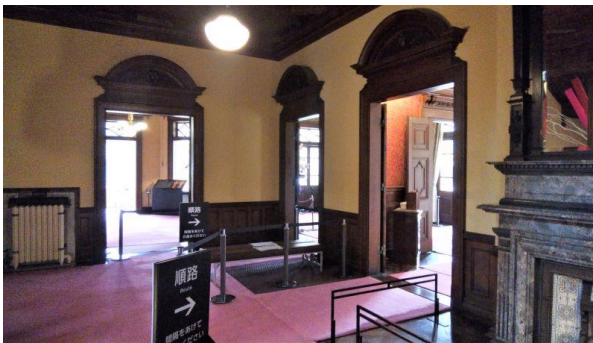
翌日も 24 時間切符を使い東京メトロの湯島の駅近く、台東区にある旧岩崎邸に行く。

ここは三菱を創業した岩崎彌太郎の長男で三代目社長の久彌の本邸として造られ、現在は東京都の公園になっている。庭園もあるから公園というのも分からないではないが、往時は立派な庭園だったとしても今私が見る限りは単なる芝生の庭でありあまり興味がわかない。

しかしその庭を前にドンと構えている見事な洋館は、1896 年（明治 29 年）に造られたものでイギリス様式の装飾、庭に面した南側には立派な列柱の並ぶベランダがある。洋館に入ると明治日本の質実剛健な雰囲気伝わってくる。そして洋館に繋がって純和風の書院造りの大きな屋敷がある。こちらの屋敷も洋館に負けず劣らず大きく素晴らしい。この洋と和の豪快で絶妙なバランスが江戸文化から西洋文化への流れを創っていったのだろう。



【旧岩崎邸の洋館】



【洋館の内部】



【日本式の屋敷】

洋館から少し離れたところに撞球室（ビリヤード場）として建てられた離れがあり、当時の日本では珍しいアルプスの山小屋風の造りとなっている。この離れだけでも充分素晴らしく、客室や書斎に使いそうだが、それをビリヤードだけに使うのだから贅沢この上ない。さらに離れと洋館は地下道で繋がっており、その間に井戸のようなものがあってそれが地下道の明かり取りになっている。



【左は洋館から見た離れと井戸のようなもの 右は離れのビリヤード場】